白川の関

――『おくのほそ道』風景余説――

松隈義勇

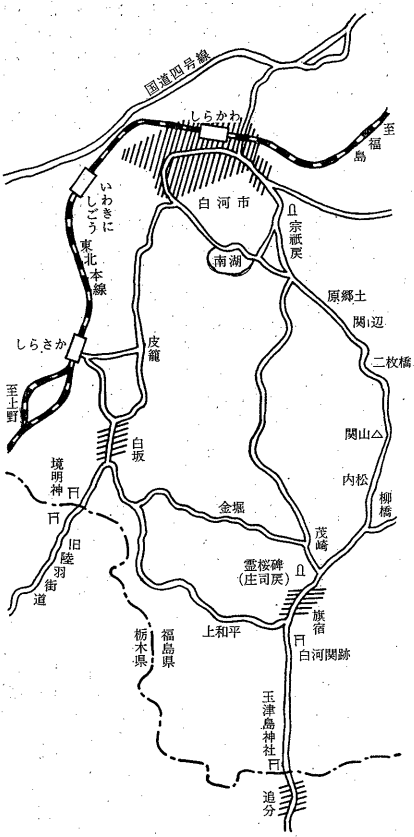
奥州白川の関の跡を尋ねようと日帰りの旅に出た。那須おろしの激しく吹く晩秋の肌寒い日であった。車の運転は最近白河の町に移り住んだ教え子のH子の夫君に頼んだ。H子も生後八か月の愛児を抱いて乗り込んでいる。雲が多くて時雨でも来そうなけはいがみえるので、まず関山に登ることにした。関山から旗宿の関跡、白坂の境明神（いわゆる新関跡）という道順をとると、芭蕉とは逆のまわり方になるわけである。

関山は国鉄白河駅から東南方八・五キロ。八溝山地の北端に当り標高六百二十メートルほどの小山だが、抜きん出て高いので遠方からもよく見える。関辺の集落の方からは小型自動車なら登れるということだったが、この山路は急峻で石がゴロゴロして小型もだめ。二キロの登り路を赤ん坊を父親が背負う。坂の苦手の私は息が喘いだ。しかし覆いかぶさる雑木の陰の山路は清爽幽寂だった。かつては真言宗の古刹成就山満願寺があったので、紅葉した木の陰にふと石仏があったりする。頂上には鐘楼と粗末な無人の堂とがあるだけで、芭蕉が登った時には堂塔伽藍が備わっていたというのが嘘のように思える。四方に畳なわる那須・会津・八溝などの山なみの眺望をほしいままにすることができるが、山々を巡る秋風はそれだけに遠慮会釈ない勢いでぶつかり、吹き透してゆく。

関山々麓から旧関蹟へはもとの道路に一度戻ってから南へ六キロあまり。旗宿の集落へ入る手前に、畑を背にして「霊桜碑」の標示があり、ここが庄司戻しの旧跡である。継信・忠信の二子を源義経の家臣として従軍させた佐藤庄司基信が兄弟の出陣をここまで見送って軍功を占って突き立てた桜の杖が根付き、花を着けた。その霊桜の跡と伝えられる。

史跡指定を受けた「白河の関跡」の入口には、二、三台の観光バスが駐車している。指定区域は白河神社の境内で、こんもりした樹叢に覆われた小丘をなしている。周囲の田には丈の低い稲架が立て連ねてあり、田川の岸では芒の穂が強い風で横ざまに靡いていた。境内に足を入れると、老杉を主とした樹林が鬱蒼として急に暗さを覚える。入口近い鳥居前の地面から巨大な蛇のような藤の幹が鎌首をもたげて大杉に巻き付いているのが、古蹟らしい雰囲気を印象させる。その後方に、かつての領主だった松平定信（白河楽翁侯）の建てた「古関蹟」の厚い石碑が重々しく立っている。従前諸説まちま

ちでいずことも判定し難かった白川の関の跡は、定信の考証と裁定によって確乎たるものとなり、世に知られた。それも江戸後期寛政年間の事に係るから、芭蕉が訪れた当時は、この地は余り注目せられず、口碑と心証以外には関址と認める決め手とてなかった。昼尚暗い石段を緩く登り詰めた正面に、西面して白河神社の社殿がある。ここも芭蕉の来た時には白河神社ではなくて、小さな祠程度のものがあるだけだったらしい。曽良が『旅日記』に「町より西ノ方ニ住吉・玉島ヲ一所ニ祝奉宮有。古の関明神故ニ二所ノ関ノ名有ノ由、宿ノ主申ニ依テ参詣」と記した、その二所の関の明神とは、この関の森にあった祠であろうか。それともその記述の通り旗宿の町の西方にあった別の社であろうか。関の森は旗宿の南方に当るわけで、釈然としない所は残るが、一応この関の森と見ておいてよさそうである。芭蕉にしてもおぼつかない気持でここを訪れ、また去ったようである。



境内は数々の文学的記念物に満ちている。社前の左側の大きな歌碑には、

たよりあらハいかて都へつけやらむ　平兼盛
けふしら河のせきはこえぬと
みやこをハ霞とともにたちしかと　能因法師
あきかせにそふくしら河の関
秋かせに草木のつゆをはらハせて　梶原景季
きミかこゆれハ関守もなし

と刻まれ、また「後鳥羽天皇御製　雪にしく袖に夢路もたえぬへし」また白河の関の嵐に」の歌碑もあり、そのほか川柳碑もある。さらに昭和に入って造られた「奥の細道の碑」（加藤楸邨筆）もある。

社殿をやや離れた右手には王朝の歌人藤原家隆の植えたと伝える従二位の杉という巨木が亭々と空を摩しつつ枝を拡げているし、源義家の故事を留める桜の朽木とか、古いゆかりのあれこれはいくらでも探ることができる。

社殿のある丘頂を草に埋もれた低地が帯状に取り囲んでいるのは、空濠（からぼり）の跡という。また、社の横手や背後には土塁や柵や住居跡などという標示があり、昭和三十四年から始められた学術発掘調査の成果だという。ただし、これらは中世のかなり大きな居館の遺跡であって、関所の建造物そのものの跡ではないということである。だがいずれにしても、全般の景観といい、あるいは数々の遺跡・遺物・碑石などの存在といい、人をして懐古の情を催さしめるに足

るものは備わっている。

これから白坂の境明神へ回るのであるが、その前に今来た道を更に三・五キロほど南下して、追分の関の明神まで行ってみた。切通しになった道路は車の往来も少なく、両側の丘腹に木草が茂った、うら寂しい所である。右手の小高い所に「玉津島神社」の標石が立つので、見上げるとその上に老杉に囲まれた小さな社殿が静まりかえっている。凹凸になった石段を登って参拝する。トタン囲いの社殿で境内も狭いが、物寂びた気分が満ちる。折から時雨がはらはらと降ってきた。道路の反対側には白河藩の藩界を示す石標が残り、即ちここが野州と奥州（みちのく）との国境、即ち栃木・福島の県境である。この辺を白川古関址に擬する一説があり、曽良の『備忘録』にもその事の記載があるが、後になって須賀川の等躬からもそのことを聞かされたが、後の祭りで、諦めざるを得なかった。芭蕉の口惜しさは察することができる。

追分から旗宿に戻って迂回して白坂へ入る。境の明神は旧陸羽街道を白坂の町から南へ一キロほど行った所で、国境、県境に当る地点である。道の東側の丘腹の叢林中に「従是北白川領」の石標があるなど追分とよく似ている。石標の反対側の小高い所に、由緒ありげな二つの神社が境界を挟んで並んでいる。関東側が男神の住吉神社、奥州側が女神の玉津島神社である。車から下りると、少し繁くなった時雨が冷たく額に当る。境内の樹木が道路の半ばを覆いかくすほどに茂っているので、折からの天気で一層暗さが加わった。住吉神社は明治の火災後の仮社殿のもの佗しい姿をとどめているが、玉津島神社の方は江戸末期再建の堂々たる社殿が、隨身門に守られて、境明神のあるじ顔である。

この境内にも文学碑が多い。中にも、青みがかった形よい自然石に芭蕉の真蹟を模した字体で彫った「風流のはじめや奥の田うへ唄」の句碑が際立っている。樹陰の暗い所にあるその碑の面てにも時雨がかかって青みが増した。

明神から白坂へ戻る途中の道路脇に古昔からの衣更の清水があって、今でも清冽な泉が湧出を続けている。この旧陸羽街道は近世の官道であった。多くの旅人があるいは清水に咽喉をうるおし、あるいは明神前にあった茶室に憩って、ここが白川の関の跡だと、感慨を催したことであったろう。芭蕉もまずここを目がけて足を運んできた。しかしここが必ずしも古関址ではないという認識を持ったもののごとく、曽良の記述によれば「古関を尋て」右へ切れて旗宿の方へと向った。

往昔の白川の関の遺跡とは一体どこなのだろうか。今日に至っても、それは判然としない。いま俗に旗宿遺跡を「古関」とするのに対して、白坂境明神の地点を「新関」と呼んでいるが、それとて何らの拠り所はない。更に或いは追分の関の明神の辺りといい、また関山という。以上四つの説のあることは、既に芭蕉も知る所であった。そのほか白河市街の旭町付近といい、白河市東方の関和久付近という説もあるなど、諸説紛々として到底真相がつかみ難い。

金子誠三氏の『白河の関』には、西暦一三〇〇年のころの白川の関の景観を描写した、『一遍上人聖絵』や『一遍上人絵詞伝』の中の地貌や風情は旗宿関の森のような印象を受けるとある。また宗祇の『白河紀行』の記事からする印象も関の森が最も適合するように思われる。尾形仂氏は、男女神二所の併列の形が古関址を示すものであり従って境明神（白坂）こそ古関の位置を伝えるものとの岩田孝三氏の説を紹介している。しかしとにかく現状をもって古代を量

ることには疑問があろう。

素人考えながら地図を案ずるに、原初の白川の関の所在は猶いずことも知り得ないが、関柵は必要に応じて各所に移動したのではあるまいか。蝦夷鎮圧のためには北に向いた地点が、やがて奥州独立体制確立後には南や西に面した防備地点が関塞とされたのであろう。従って白坂・追分方面は比較的新しい場所といえようか。そして関の森は古代・中世を通じて中心的な役割を担っていたのではないかと思われる。

芭蕉は、白坂境明神に至って、古関址は旗宿の方であると聞いて直ちにそちらへ向い、同宿一泊、翌朝に関の森を尋ねたが、ここでも古関址の確認ができず、更に北進して、もう一つの古関址と伝えられる関山に登ってまでみたのである。かくて彼のこの旅の主要目的地の一つである白川の関の跡はついに突き止められずに終ったわけで、その焦躁や落胆はいかばかりであったろう。今日のわれわれといえども、考証的に突き止めようとする限りは、似た思いを味わざるをえない状態にあるわけだが、文学的・趣味的に考えようとするならば、一応公認され、それらしい景観を保つ「白河の関跡」を持つことができていることをもって満足すべきであろう。

心許なき日かず重るまゝに、白川の関にかゝりて旅心定りぬ。いかで都へと便求しも断也。中にも此関は三関の一にして、風騒の人心をとゞむ。秋風を耳に残し、紅葉を俤にして、青葉の梢猶あはれ也。卯の花の白妙に、茨の花の咲そひて、雪にもこゆる心地ぞする。古人冠を正し衣装を改し事など、清輔の筆にもとゞめ置れしとぞ。

卯の花をかざしに関の晴着かな　曽良

『おくのほそ道』のこの一節は、古関址をつかめなかったためか具体的な景観・地形の描写を欠き、ほとんど古歌や伝統常識に基づいた美文である。例えば冒頭の「日かず」の語にしてからが、『類船集』等に「白川の関」の寄合に「日数ふる旅」と挙げられ、この関を詠じた古歌に多く用いられた。このように検討するなら、本文の一語一句にも古歌をふまえた修辞が指摘できる。とりわけて重要と思われる歌としては、白河神社々頭の歌碑に刻された平兼盛の歌（拾遺）、能因の歌（後拾遺）をはじめ、源頼政の「都にはまだ青葉にてみしかども紅葉ちりしく白川の関」（千載）、西行の「白川の関屋を月のもるかげは人の心をとむるなりけり」（山家・新拾遺）などが挙げられよう。終りの部分は藤原清輔の『袋草紙』の記事の援用であることは言うまでもない。「心許なき日かず重るまゝに」に続く「白川の関にかゝりて旅心定りぬ」の一節は、旅人の心情をよく写し得た名文として喧伝されるが、これとて勘ぐれば、この関がみちのくへ入る第一歩だという伝統的常識に基いて文を成しただけであったかもしれないのだ。

なお構想上からみると、修辞として紅・青・白の色彩の配合を試みた跡も見られるという指摘もされている[注2]が、私が特に気付くのは春夏秋冬の季節の配合である。現在時の初夏の季を明示した語は「青葉」と「卯の花・茨の花」である。これらを軸として、秋季を「秋風」と「紅葉」で示し、更に冬を「雪にもこゆる」で示している。遡って春はというと、白川の関へ至る旅の出発が春季であることは古歌の世界の常識で、それを「心許なき日かず重るまゝに」で暗示しているが、これには『おくのほそ道』の冒頭部分の「春立る霞の空に、白川の関こえんと云々」も遙かに響いていよう。

ところで、この一節の中で現実に存在した景物を指摘するとなれ

ば、「青葉の梢」と「卯の花」「茨の花」だけにすぎない。そのうち「青葉の梢」は歩き回った白河付近の各所で確かに実見したに違いないが、頼政の歌に拠ったらしい点で、全くの現実の景物ともいわれないふしがある。「卯の花」もこれに近い性格をもつ。藤原季通「見て過ぐる人しなければ卯の花の咲ける垣根やしら川の関」（千載）や、藤原定家「夕づく夜入りぬる影もとまりけり卯の花咲ける白川の関」（拾遺愚草・夫木集）などの古歌を見出すことも困難でなく、「卯の花」は『類船集』などにも「白川の関」の寄合となってさえいる。結局完全な実景といえるのは「茨の花」だけということになり、ここにわずかに俳諧師芭蕉のリアルな眼を認め得るわけであるが、これとても実は同じく白い花という卯の花との縁で掬い上げたにすぎぬのかもしれぬという疑いも残る。

このような点から推して、本文中の「卯の花」はつまりは虚構であって、芭蕉来訪時の陰暦四月二十日（陽暦の六月七日）には事実上は咲いていなかったはずだとする一説がある。昭和四十七年に佐伯昭市氏が出した説であるが、これに対して久富哲雄氏は数回にわたり実地調査を重ねた上で、卯の花が芭蕉来訪時に咲いていたことは確実であることを論証した。日時を芭蕉来訪の日と一致させるだけで済まさず、気象条件のふれを考慮して、須賀川の栗の花の開花時期と照らし合せるなど、きわめて科学的な考証まで試みる精到さだった。私は久富氏の調査にしばしば同行させてもらう幸を得ているので、卯の花が咲いていたことは疑いのないことだと思っている。ただし、「白川の関」と「卯の花」が寄合であるという伝統の系譜がなかった場合にも、芭蕉がここで嘱目の卯の花を取り上げたかどうかはわからないことで、このことは事実上花があったかどうかとは別個の問題である。なお、茨の花は卯の花よりも開花期が早いので、卯の花の最盛期には既に衰えかけてはいるが、なお咲き残り、二種の白花が交じり咲いている実景をも確実に目にしている。「茨の花の咲そひて」とあるのは時間的な先後ではなくて、意識的、空間的な関係で茨の花を後又は従としているのである。

今日のところ旗宿の遺跡には卯の花の自生のものは一本も見られない（近年正面入口の参道に数株植え込まれているが）。卯の花の多く見られるのは境の明神の白坂寄りの地点から東へ折れて旗宿に通ずる山路を最とする。この路は中途から二叉に分れて共に旗宿へ通ずるので、芭蕉がどちらを通ったかはにわかに定め難い。この田畑を綴る山間の静かな路の傍の所々に、落葉低木のウツギが群生している。初夏に開くウツギの花が即ち卯の花である。円錐状をした二、三センチの五弁花は、雪の白さで、枝々の先にワッサリと群がり咲いて、それこそまさに撩乱と形容したくなる形状を呈する。この花の咲く頃には、この辺ではちょうど田植えの情景を見ることもできるであろう。

早苗にも我色黒き日数哉

西か東か先づ早苗にも風の音

共に芭蕉の句で、前のは『曽良書留』に「みちのくの名所〳〵、こゝろにおもひこめて、先、せき屋の跡なつかしきまゝに、ふる道にかゝり、いまの白河もこえぬ」という詞書きを伴って書留められている。後のは前句の改案と思われるもので、須賀川から出した白河の何云に宛てた手紙に載っているもので、何云には「関守の宿を水鶏にとはふもの」の一句を贈った。すべて言い捨てられた句だが、芭蕉は白川の関越えの句を作る努力はいろいろと試みたのである。この句中の「早苗」が、前述の「青葉の梢」や「卯の花」とよく似た条件のもとにある。

「早苗にも」の句は能因の「都をば」の歌に拠っている。能因は都にいるままで顔を日に焦して遠旅の後の姿と見せて、この歌を披露したという有名な伝説に基いたものである。能因の歌にある秋風には遠く、まだ早苗の頃だが、長旅の日数を経た私の顔色は黒く日に焼けた、という意味である。それにしても江戸出発以来一か月足らずで、しかもその半ば近くは黒羽に滞在したのだから、この句の内容も感慨も事実とは受け取り難い。ただしかし「早苗」は卯の花と同じく、確かに白川の関跡といわれる近辺で目にした現実の景物であったろうと思われる。

後の句は、前句の古歌へのもたれかかりの露骨さが意に満たぬまに試みた改案であろうが、専ら能因歌中にある「秋風」、しかして白川の関に結ぶ習いになっていた「秋風」に集中した。早苗に渡る風の微かな声の中に能因の「秋風」を早くも聞き取る趣である。上五は西風か東風かと疑う意である。西は秋に、東は春によそえられるから秋風か春風かという意味を含むが、ここはもちろん秋風が主となっている。なお「西か東か」には関址を尋ね歩いた芭蕉自身の心細さも影を落していると思われるし、また西へ東へ別れ行く関所のイメージも印象されるが、更には山本健吉氏などは「芭蕉の漂泊の思いも籠められていよう」(注5)と言う。初案に勝ること数等のかなりな句だが、字余りの上五が重くて大げさすぎるし、総体に深みが足りぬ憾みは残ろう。

ところで、この二つの「早苗」の句の発想には能因の歌のほかにもう一つ、あの有名な「きのふこそ早苗とりしかいつのまに稲葉そよぎて秋風の吹く」(読人不知、古今、秋上)の歌が踏まえられていると見て間違いあるまい。この歌によって「早苗」とあれば秋風を想うのが、古歌の伝統世界を生きる者の共通理解というものである。そこでは「白川の関→秋風→早苗」という連想も成立するはずである。芭蕉が旗宿の辺りで田にそよぐ早苗や早苗取りの実景を目にしたことは確かだとしても、もしもこの古歌の伝統がなかったら、はたして「早苗」をここで取り上げたかどうかは疑問である。

須賀川の等躬亭で披露された句に

風流の初やおくの田植うた

がある。紀行本文には「白河の関いかにこえつるや」と問われて、「長途のくるしみ、身心つかれ、且は風景に魂うばはれ、懐旧に腸を断て、はか〳〵しう思ひめぐらさず」と述べ、「無下にこえんもさすがに」と付言して披露したことになっているが、『猿蓑』その他には「しら川の関こえて」と前書きして出してあるのに徴しても、これを白川の関越えの句とすることは妥当であろう。またこれをもって「早苗」の句の全面的、根本的な改案と見ることも見当違いではあるまい。

そうとすれば、関越えの古歌の諸々をもうたい籠めたような表現が「おくの田植うた」であるはずだから、これを単に辺境の鄙びた耳珍らしい田植歌とのみ解したのでは足りないだろう。等躬への挨拶の句という性格を認め、その人の俳諧ないしは俳席をさしているとすると、それでは(そうであれば猶更)失礼になる。「おくの」とは単に奥州の風土の素樸な美を言っているだけではなくて、風流の伝統における、歴史的な美を心に置いていると解すべきだろう。

「風流の初や」とは、むろん表面的には奥州で自分が最初に接した風流ということであるが、またそれと重ねて今後の自分の風流を押し進めてゆく上での出発点になろうという、己れの把握でもあり同時に意志でもあるようなものも含めていると私には思える。すな

わちここでは、芭蕉は古歌・古典の伝統を基にして自分の芸術を築いていこうとする志向を改めて自らに認め、課したと私には見えるのである。この旅の間、芭蕉の中にこれ以後不易流行という考えが形成されてゆくことになるのであるが、そのきっかけは既にこの頃に胚胎しつつあったような気がする。芭蕉にとって白川の関とはそういう大きな意味を持った所であったのだろう。

それについて念のため言い添えておきたい。「風流の」(注6)の句の「田植歌」は和歌・連歌にはない語で、俳諧の新季語である。「早苗」は古くから使われる伝統的なことばだが、たとえそれが古典・古歌とのかかわりにおいて取り上げられていようとも、俳諧の場合には、現実のもの、現実世界を代表するものとして位置づけられているのであって、このことなくしては俳諧のアプリオリは失われてしまうのである。この点からいえば、「田植歌」「早苗」のみならず「青葉の梢」も「卯の花」「茨の花」も現実に在るものでなければならない。あるいは現実に在るものとして仕立てられた、非和歌的な立場を担うものでなければならない。

前に私は、これらのものが古歌との関わりにおいて見られていることを指摘し、その実在性を否定するような論述をした。その舌の根も乾かぬうちに、こんどは非和歌的にして現実的なものだという。矛盾も甚しいと難ぜられるに違いない。しかし芭蕉の芸術の本質をアプローチするとなると、このような矛盾した言い方になることを避けられないのである。芭蕉の俳諧芸術とは、実にこのような矛盾そのもの、二律背反そのものの上に構築されたものなのである。あくまでも伝統的なものに身を浸してこれから離れないでいながら、その反面どこかで、現実によって伝統を断ち切り否定しているという所があって、そこに俳諧性の根基を据えているのだ。このことについてはここで論じている余裕がないので、他日を期したいが、真意を誤られることを恐れて、一言だけ付け加えておく。

私は白川の関の跡を踏んでみながら、芭蕉がこの古道をどう辿り、そして古歌に対してどう対決したかを考えてみようとした。

芭蕉は白川の関にまつわる古歌のおびただしい数量と重みを前にして圧倒される思いはあったが、とにかく受け留めたこれらの歌の中で、なかんずくしかと心に留めたのは能因の歌であった。――「秋風ぞ吹く白川の関」――しかし季節の上で、その景観を現実に見ること叶わなかったゆえに、彼一流の幻術をもって言語空間に、それを描き出してみるほかはなかった。しかも結局詠句としては失敗し、わずかに紀行本文中に実現させ得たに止まった。

その芭蕉の執心した「秋風ぞ吹く」の実景を、この日、この身をもって味わい得た私は、その幸いを喜ぶべきであろうか。地貌・風土は多く変り果てたとしても――。

(注1) 尾形仂「白川の関」〔おくのほそ道注解一二〕(「解釈と鑑賞」昭四〇・五)
(注2) 志田義秀『奥の細道評釈』を初め諸書に見える。
(注3) 佐伯昭市「芭蕉の表現意識について」――「白河の関をめぐる諸問題」――(「解釈」昭四七・六)
(注4) 久富哲雄「おくのほそ道『卯の花虚構説』私見」(「解釈」昭四八・一)
(注5) 山本健吉『芭蕉全句』下巻
(注6) 尾形仂「白川の関」(前掲注解)による。